新訳グリム童話三編

―ＫＨＭ五五、六五、一九一―

グリム兄弟・編
梅内幸信・訳

『ルンペルシュティルツヒェン』（ＫＨＭ五五）

むかしむかし、あるところに粉ひきがおりました。粉ひきは、貧しかったのですが、粉ひきには美しい娘が一人おりました。あるとき、粉ひきは、たまたま王さまにお会いしたときに、もったいぶって、王さまに言いました。「わたくしには、娘が一人ございますが、娘は、ワラをつむいで、金の糸にできるのです。」王さまは、粉ひきに言いました。「そういった技がのう、わしは大好きなのじゃ。そなたの娘が、そなたの言うように、ほんとうに腕がたつのなら、娘を、あすわしの城へつれてまいれ。わしが、娘の腕をためしてみよう。」いよいよ、娘が王さまのところへつれてこられると、王さまは、娘をワラがいっぱいつまっている部屋へつれてゆき、糸車と糸巻をわたして、言いました。「さあ、仕事にかかるがよい。もし、おまえが、ひと晩かけて、あすの朝までに、このワラをつむいで金の糸にしておかなければ、おまえの

命はないと思え。」そう言うと、王さまは、自分でその部屋に鍵をかけましたので、娘は、部屋に独りとり残されました。

さて、かわいそうな粉ひきの娘は、部屋の中に独り座っておりましたが、どうしてよいものやら、ひどく途方にくれました。どうしたらワラをつむいで金の糸にできるのか、まったく分かりませんでした。娘は、ますます不安になりましたので、しまいには泣きだしてしまいました。そのとき、とつぜん扉が開いて、一人の小人が入ってきて、言いました。「こんばんわ、粉ひきのお嬢ちゃん。どうして、そんなに泣いてるの？」娘は、答えました。「あのねえ、あたしワラをつむいで金の糸にしろって言われているんだけれど、それができないの。」小人は、言いました。「おまえさん、おいらになにくれる？　おいらが、おまえさんのかわりにつむいであげたらね。」

「あたしの首かざりをあげる」と、娘は言いました。小人は、首かざりを受けとると、糸車の前に座って、ブーン、ブーン、ブーンと三べん回すと、糸巻は糸でいっぱいに巻かれました。すると、小人は、別の糸巻をはめて、ブーン、ブーン、ブーンと三べん回すと、二番目の糸巻も、糸でいっぱいに巻かれました。こうして、仕事が朝まで続けられると、ワラは全部つむがれて、すべての糸巻は、金の糸でいっぱいになりました。日がのぼると、さっそく王さまはやってきて、金の糸を見ると、おどろいて喜びましたが、王さまの心は、ますます金が欲しくなるばかりでした。王さまは、粉ひきの娘を、ワラのつまっている別の部屋へつれてゆかせました。この部屋は、前の部屋よりはるかに大きかったのですが、王さまは娘に、命がおしければ、この部屋のワラも一晩中につむぐのじゃ、と命令しました。娘が、どうしてよいやら分からずに、泣いていると、またしても扉が開いて、れいの小人があらわれて、言いました。「おまえさん、おいらになにくれる？　おいらが、おまえさんのかわりにワラをつむいで金の糸にしたらね。」「あたしの指輪をあげる」と、娘は答えました。小人は、指輪を受けとると、今度も糸車をブーン、ブーン、ブーンと回して、朝までにワラを全部つむいで、キラキラ輝く金の糸にしてしまいました。王さまは、このようすを見ると、ことのほか大喜びでしたが、まだまだ金に

は飽き足りず、粉ひきの娘を、ワラのつまっている、さらに大きな部屋へつれてゆかせて、娘に言いました。「このワラも、今晩中につむぐのじゃ。もし、これがおまえにうまくできたら、おまえをわしの妻にしてやろう。」「たかが粉ひきの娘とはいえ、国中さがしても、これいじょう金持ちの女はおるまい」と、王さまは考えたのです。娘が独りになると、また小人が三度目にあらわれて、言いました。「おまえさん、おいらになにくれる？　もし、おいらが、おまえさんのかわりに、今度もワラをつむいであげたらね。」「あたし、あげられるようなもの、もうなんにももってないわ」と、娘は答えました。「それじゃ、おいらに約束しな。もし、おまえさんが、お妃さまになったら、生まれた最初の子どもをくれるってね。」「このさき、どうなるのかだれにも分かりゃしない」と、粉ひきの娘は考えましたし、実際、ひどく困って、どうすることもできませんでした。そこで、娘は、望みのものを小人に約束してしまいました。すると、小人は約束通り、もう一度ワラをつむいで、金の糸にしてくれました。朝になって王さまがやってきて、すべて望み通りになっているのを見ると、王さまは娘と婚礼の式をあげ、粉ひきの美しい娘は、お妃さまになりました。

一年たつと、お妃さまは、かわいい子どもを産みましたが、小人のことはすっかり忘れておりました。ところが、小人は、とつぜんお妃さまの部屋にあらわれて、言いました。「さあ、おまえさんがおいらに約束したものを、おいらにくれよ。」お妃さまは、びっくりぎょうてんして、子どもをとらずにおいてくれるなら、国中の宝を全部あげると申し出ました。けれど、小人は、言いました。「だめだよ、おいらには、生きているものの方が、世の中のどんな宝よりもいいんだから。」すると、お妃さまは、ひどく嘆き悲しみ、泣きだしましたので、小人は、お妃さまを気の毒に思って、言いました。「三日間考えるひまをあげよう。もし、おまえさんが、それまでにおいらの名前を言い当てたら、子どもをうばわないことにしよう。」

さて、お妃さまは、一晩中、それまで聞いたことのある名前を全部、よく思い出してみました。そのうえで、使いの

者を一人出し、それいがいの名前を求めて、国中あちこちたずねさせました。次の日に小人がやってくると、お妃さまは、カスパーかい、メルヒオールかい、バルツァーかいというふうにして、自分の知っている名前を全部、次から次へと言ってみましたが、どの名前を聞いても、小人は、「そんなの、おいらの名前じゃないよ」と言うばかりでした。二日目になると、お妃さまは、おとなりの国国では、どういう名前があるかを、あちこち聞いて回らせ、小人に、いちばん変わった、いちばん珍しい名前をあげてみました。「おまえの名前は、ひょっとしてリッペンビーストかい、ハンメルスヴァーデかい、それともシュニュールバインかい？」ところが、その答えは、いつも「そんなの、おいらの名前じゃないよ」でした。三日目に、使いの者がもどってきて、報告しました。「新しい名前は、一つとして見つけることができませんでしたが、ある高いお山の森のはずれにたどりつき、キツネとウサギも、おやすみなさい、と言うころ、小さな家を一軒見つけたのでございます。その家の前には、火がたかれていて、火のまわりを、それはもうおかしな小人が、一本足でピョンピョン飛びはねて叫んでおりました。

きょうはパン焼き、あすは酒作る、
あさって妃の子をば、手に入れる。
ああ、楽し、だあれも知らねえとは、
ルンペルシュティルツヒェン、これがおいらの名前とは！」

この名前を聞いたとき、どんなにお妃さまが喜んだか、みんなにも分かるでしょうね。やがて、まもなく小人がやってきて、たずねました。「さあ、お妃さま、おいらの名前は、なんじゃろな？」お妃さまは、最初に、たずねました。「お

まえの名前は、クンツかい？」「はずれ。」「おまえの名前は、ハインツかい？」「はずれ。」「おまえの名前は、ひょっとして、ルンペルシュティルツヒェンかい？」「悪魔から教えてもらったな、悪魔から教えてもらったな」と、小人は叫び、怒って右足ではげしくじたんだを踏みましたので、小人の体は、腰まで地面にめりこんでしまいました。すると、小人は、怒り狂って、左足を両手でつかむと、自分の体を真っ二つに引き裂いてしまいました。

『千枚皮』（ＫＨＭ六五）

むかしむかし、あるところに王さまがおりました。王さまには、金の髪のお妃さまがあり、お妃さまは、それはもう美しく、この世にくらべる人がいないほどの美人でした。ところが、お妃さまは、病にふせってしまいました。そうして、お妃さまは、まもない死を感じとると、王さまをお呼びになって、言いました。「わたくしが死んだのち、もし、また結婚なさるおつもりであるならば、わたくしと同じくらい美しく、わたくしと同じような金の髪の人でなければ、結婚なさらないでください。このことを、わたくしにかたくお約束ください。」王さまが、このことをかたく約束すると、お妃さまは、目をつむり、亡くなってしまいました。

王さまは、長い間悲しみにくれ、二度目のお妃をむかえるなど思いもよりませんでした。とうとう、王さまの相談役たちが言いました。「わたくしどもが、お妃さまをいただけますよう、王さまにはもう一度結婚してもらうしかありません。」そこで、あちこちに使いのものが出されて、美しさにおいて、お亡くなりになったお妃さまに匹敵するような美人の花嫁がさがし求められました。ところが、世界中をさがして、たとえ美人が見つかったとしても、お亡くなりになったお妃

さまのような金の髪の人はおりませんでした。こうして、使いのものたちは、目的をはたせずに、国にもどってきました。

さて、王さまには、一人の娘がありました。この娘は、お亡くなりになった母親とそっくりの美人で、また、そっくりの金の髪をしておりました。娘が大きくなったとき、王さまは、あるとき娘をしげしげと眺めましたが、娘がなにからなにまで、お亡くなりになったお妃さまに似ていることに気づくと、王さまは、きゅうに娘にはげしい愛情を感じました。そこで、王さまは、自分の相談役たちに言いました。「わしは、娘と結婚するつもりじゃ。娘は、わしの亡くなった妃とうり二つじゃし、それいがいには、あれとそっくりの花嫁を見つけることができんのじゃからのう。」相談役たちは、これを聞くと、びっくりぎょうてんして、言いました。「父親が実の娘と結婚することは、神さまが禁じております。罪深いことから、良い結果が生まれたためしはございません。お国も、その災いをこうむって、滅びることになりましょうぞ。」娘は、父親の決心を耳にすると、相談役たちいじょうにびっくりぎょうてんしましたが、それでも、父親にそういった考えを思いとどまらせる望みを捨ててはいませんでした。そこで、娘は、王さまに言いました。「わたしが、おとうさまの願いをかなえます前に、まず、わたしは、三着の衣装をいただきとう存じます。その一着は、お日さまのように金色に輝くもの、もう一着は、お月さまのように銀色に輝くもの、最後の一着は、お星さまのように青白く輝くものをいただきとう存じます。さらには、千種類の毛皮から作られました外套を一着いただきとう存じます。そのためには、おとうさまのお国にすむ動物という動物がみな、その皮を一切れずつさしださなければなりません。」そのとき、娘は、考えたのです。「こんなものを手に入れるなんて、とてもできやしないことなんだから、これでおとうさまの変なお考えを思いとどまらせられるわ。」ところが、王さまは、思いとどまるようすもなく、国中でいちばんはた織りのじょうずな乙女たちに、三着の衣装を織らせました。一着は、お日さまのように金色に輝くもの、もう一着は、お月さまのように銀色に輝くもの、最後の一着は、お星さまのように青白く輝くものを織らせました。それから、召しかかえていた狩人たち

には、国中の動物を全部捕えさせて、その一匹一匹から一切れずつ皮をはがさせました。そうやって、千種類の毛皮から一着の外套が作られました。とうとう、すべての部分がぬい合わせられると、王さまは、その外套をもってこさせ、それを娘の前にひろげて、言いました。「あすは結婚式じゃぞ。」

今となっては、おとうさまの決心を変える望みがもはやたたれたとさとると、お姫さまは、逃げだす覚悟をかためました。みんなが寝静まった真夜中に、お姫さまは、起きあがると、自分の宝箱の中から、金の指輪、小さな金の糸車、小さな金の糸巻の三つのものを取り出しました。お日さまとお月さま、お星さまの衣装三着を、お姫さまは、クルミの殻の中へしまいこみ、千枚皮の外套をはおり、顔と両手にススを塗って、真っ黒にしました。これがすむと、お姫さまは、運を神さまにおまかせし、お城を出て、夜通し歩くと、大きな森の中へやってきました。お姫さまは、つかれましたので、木の洞の中へ入って、眠りこんでしまいました。

お日さまがのぼりましたが、お姫さまは、眠り続け、真昼になっても、まだ眠り続けたままでした。その日、この森を所有している王さまが、たまたまこの森で狩をしておりました。王さまの猟犬たちは、その木のところにやってくると、鼻をクンクンさせてにおいをかぎ、木のまわりを走り回って、ワンワンほえたてました。王さまは、狩人たちにむかって言いました。「どんなけものがあそこにひそんでいるのか、見てまいれ。」狩人たちは、命令にしたがって、見て、もどってくると、言いました。「あの木の洞には、わたくしどもが、ついぞ見たことのないような、きみょうなけものが一匹おりまする。その体は、千種類の皮におおわれておりまする。けものは、横になって眠っておりまする。」王さまは、言いました。「よいか、生けどりにできるかやってみて、うまくできたら、馬車にしばって、つれ帰るのだ。」狩人たちが、娘につかみかかると、娘は、目をさまし、ひどくおびえて、狩人たちにむかって叫びました。「あたしは、父母にも見捨てられた、あわれな子どもです。どうか、あわれんで、いっしょにつれていってください。」

「千枚皮、おまえは、台所仕事にぴったしだ。さあ、いっしょにこい。台所で灰をかき集めるがよかろ。」こうして、狩人たちは、千枚皮を馬車にのせ、お城につれ帰りました。お城につくと、狩人たちは、千枚皮に、階段の下にある、日のさしこまない小さな家畜小屋をあてがって、言いました。「千枚皮のおチビ、おまえは、ここで寝起きするがよかろ。」それから、千枚皮は、台所にやられ、そこでまきや水を運んだり、火をおこしたり、鳥の羽をむしったり、野菜をより分けたり、灰をかいたり、いやな仕事は、なんでもしました。

こうして、千枚皮は、長い間、ほんとうにみじめなくらしをしておりました。ああ、美しいお姫さま、あなたの運命は、これからどうなることでしょう！　ところが、あるとき、お城で宴会が開かれることになると、千枚皮は、料理番に言いました。「ちょっと上へあがって、ようすを見てきてもよろしいでしょうか？　戸口の前に立って、外から中を見るだけでございますから。」すると、料理番は、答えました。「いいとも、見ておいで。でもな、三十分たったら、またここにもどってきて、灰をかきあつめるんだぞ。」そこで、千枚皮は、小さなランプをもって、自分の家畜小屋に入ると、毛皮の外套をぬいで、顔と両手に塗ってあるススを洗い落としました。すると、千枚皮の美しさが、もとどおり完全にあらわれました。それから、千枚皮は、クルミをあけて、衣装を取り出すと、それは、お日さまのように、金色に輝きました。したくがすむと、千枚皮は、宴会場へとあがって行きました。すると、いあわせた人人は、みんな道をあけました。というのも、だれも千枚皮を知りませんでしたので、人人はみな、この方は、どこぞのお姫さまにちがいない、と考えたからです。けれど、王さまは、千枚皮の方へやってきて、手をさしのべ、千枚皮と踊りました。王さまは、ひそかに考えました。「これほどまでに美しい人は、ついぞお目にかかったことがない。」踊りが終わると、千枚皮は、おじぎをしましたが、王さまがいあわせた人人を見回っているうちに、千枚皮は、姿をくらまし、どこにいったのかだれにも分かりませんでした。お城の前に立っていた見張りたちが呼ばれて、問いただされましたが、だれも千枚皮の姿を見たもの

はおりませんでした。
千枚皮は、自分の小さな家畜小屋の中へかけこんで、すばやく衣装をぬぎ捨て、顔と両手を黒く塗って、毛皮の外套をはおり、ふたたび千枚皮にもどっていたのです。こうして、台所にいって、仕事にとりかかって、灰をかき集めようとすると、料理番が言いました。「その仕事は、あすまでほっといていいから、王さまにさしあげるスープを作ってくれ。おれもな、上のようすをちょっくらのぞいてみたいんだ。だがな、髪の毛一本スープの中へ落としちゃならんぞ。落としでもしたら、もう飯にはありつけんからな。」こう言って、料理番は、出て行きました。千枚皮は、王さまにさしあげるスープとして、思いっきり腕をふるって、パンスープを作りました。これができあがると、千枚皮は、小さな家畜小屋から金の指輪を取ってきて、これを、スープが盛りつけられた深皿の中に置きました。舞踏会が終わると、王さまは、スープをもってこさせて、これを食べましたが、あまりにもおいしいので、こんなにおいしいスープは食べたことがない、と思ったほどでした。ところが、王さまが、皿が空になるまで食べると、皿の底に金の指輪が一つあるのに気づきましたが、どうしてそれがそこにあるのか、がてんがゆきませんでした。そこで、王さまは、料理番に自分のところにくるよう命じました。料理番は、この命令を聞くと、おどろいて、千枚皮に言いました。「きっと、おまえが、髪の毛をスープの中に落としたんだな。もし、それがほんとだったら、ぶんなぐってやるからな。」料理番が王さまの前に出ると、王さまは、だれがスープを作ったかたずねました。料理番は、答えました。「作ったのは、わたくしでございます。」しかし、王さまは、言いました。「それは、ほんとうのことではあるまい。あのスープは、いつもとは作り方がちがっておったし、はるかによい味であったぞ。」料理番は、答えました。「ほんとうのことを申しあげますと、あのスープを作りましたのは、わたくしではございませんで、千枚皮なのでございます。」すると、王さまは、言いました。「おまえはさがって、そのものをここにまいらせるがよい。」

千枚皮がやってくると、王さまは、たずねました。「おまえは、なにものじゃ？」「わたしは、父も母ももたぬ、あわれな子どもにございます。」王さまは、続けてたずねました。「なにゆえに、わしの城におるのじゃ？」千枚皮は、答えました。「わたしは、なんの役にも立たぬものにございます。そそうをして、履き物を頭に投げつけられるのが関の山にございます。」王さまは、続けてたずねました。「スープの中にあった指輪を、どこから手に入れたのじゃ？」千枚皮は、答えました。「指輪など、存じません。」こうして、王さまは、なに一つつきとめられずに、千枚皮をさがらせざるをえませんでした。

しばらくして、また宴会が開かれると、千枚皮は、この前と同じように、ようすを見に行く許可を求めました。料理番は、答えました。「いいとも、だがな、三十分たったらもどってきて、王さまにさしあげるパンスープを作るんだぞ。王さまは、そのスープが、たいそう好きなんだから。」そこで、千枚皮は、自分の小さな家畜小屋にかけこむと、すばやく体のススを洗い落とすと、クルミの中から、お月さまのように銀色に輝く衣装を取り出して、これを身につけました。それから、千枚皮は、上にあがりましたが、どこぞのお姫さまにそっくりでした。すると、王さまは、千枚皮の方へ近づいて、千枚皮にまた会えたことを喜び、また、ちょうど舞踏会が始まりましたので、千枚皮といっしょに踊りました。ところが、舞踏会が終わると、またしても千枚皮は、とてもすばやく姿をくらましましたので、王さまは、千枚皮がどこへゆくえをくらましたのか、つきとめられませんでした。千枚皮は、自分の小さな家畜小屋へ飛びこむと、もとの毛皮のおチビにもどって、台所へ行き、パンスープを作りました。料理番が上にあがっているすきに、千枚皮は、金の糸車を取ってきて、それを深皿の中へ入れ、その上にスープを盛りました。そのあとで、スープが王さまに出され、王さまは、それを食べましたが、この前と同じように、とてもおいしかったので、料理番を呼びだすと、料理番は、今度もまた、そのスープを作りましたのは、千枚皮でございます、とほんとうのことを申さねばなりませんでした。千枚皮は、また王さ

まの前に出ましたが、わたくしなど、そそうをして、履き物を頭に投げつけられるのが関の山でございますし、金の糸車など、つゆも存じあげません、と答えました。

王さまが、三度目に宴会をもよおすと、今度もこれまでと同じような運びとなりました。「なるほど」と、料理番は言いました。「毛皮のおチビ、おまえは魔法使いだね。おまえは、いつもなんかスープに入れるとそれでスープの味がとてもよくなって、わしのものより王さまのお口に合うんだからな。」けれど、千枚皮が、しきりとたのむので、決められた時間だけ、行かしてあげました。このとき、千枚皮は、お星さまのように青白く輝く衣装を身につけ、そのまま大広間に入りました。王さまは、またこの美しい乙女と踊りながら、この人は、これまでになく美しい、と考えました。王さまは、踊っているうちに、千枚皮に気づかれないように、その指にこっそり金の指輪をはめたのです。そのうえ、舞踏会をなんとか長引かせるように命じておいたのです。舞踏会が終わると、王さまは、千枚皮の両手をしっかりにぎっていようと思ったのでしたが、それでも、千枚皮は、両手をふりほどいて、とてもすばっしこく人人の間にまぎれこみましたので、王さまは、見うしなってしまいました。千枚皮は、必死にかけて、階段の下にある自分の家畜小屋にもどりました。三十分どころか、一時間いじょうも上におりましたので、千枚皮は、美しい衣装をぬぎ捨てることもできず、その上から毛皮の外套をはおるのがせいいっぱいでした。そして、あわてておりましたので、顔と両手に残らずススを塗ることができず、指が一本白いままになっておりました。千枚皮は、そのまま台所へかけこみ、王さまにさしあげるパンスープを作り、料理番が上にあがると、金の糸巻をその中へ入れました。王さまは、金の糸巻を皿の底に見つけると、千枚皮を呼びだしました。すると、千枚皮の白い指が王さまの目にとまりましたし、踊りの間にこっそりはめこんでおいた指輪に気づきました。そこで、王さまは、千枚皮の手をつかんで、しっかりとにぎりしめました。千枚皮が、手をふりほどいて、逃げだそうとしましたが、そのひょうしに、毛皮の外套が、わずかばかり口を開けて、お星さまの衣装の輝きがもれ

でました。王さまは、その外套をつかんで、それをひきはがしました。すると、金の髪があらわれ、続いて、千枚皮のほんとうの姿が全身きらびやかに輝いてあらわれましたので、もはや身のかくしようがありませんでした。ススと灰が、千枚皮の顔からぬぐいさられると、千枚皮は、この世でまだだれも見たことがないほどの美人なのでした。王さまは、言いました。「おまえが、わたくしの愛する花嫁じゃ。二度とふたたび、はなればなれになるまいぞ。」これに続いて、婚礼の式が祝われ、二人は、死ぬまで楽しくくらしました。

『アメフラシ』（ＫＨＭ一九一）

むかしむかし、あるところに一人のお姫さまがおりました。お姫さまのお城の天守閣には、十二の窓のついた広間がありました。これらの窓は、四方八方に向いていて、お姫さまがそこにのぼって見回すと、国中くまなく見渡せるのでした。一番目の窓から見るだけでも、ほかの者たちよりもはっきりと見えたのですが、二番目の窓からは、もっとよく見え、三番目の窓となると、さらにくっきりと見えたのです。このようにして、十二番目の窓へと進むと、地上にあるものでも地下にあるものでも、お姫さまに見えないものはなに一つとしてありませんでした。ところが、お姫さまは、誇りが高く、だれの言うことにも従わず、一人で国を支配するつもりでしたので、お姫さまの花婿になろうとする者は、お姫さまが発見できないように、姿をくらますことができなければならない、というお触れを出させました。しかも、試すのはよいが、もしその者が、お姫さまに発見されたら、その者の首ははねられ、杭につき刺してさらす、というのです。お城の前には、さらし首のついた杭が、すでに九十七本立ち並び、それからは長いこと、運試しを名のり出る者はおりません

でした。お姫さまは、うれしくなって、「これで、一生独りでいられるわ」と考えました。こうしたおり、三人の兄弟がお姫さまの前に現れて、運試しをしてみたいとお姫さまに申し出ました。一番年上の若者は、石灰石採掘場の穴の中にもぐりこめばだいじょうぶだと考えましたが、お姫さまは、一番目の窓から見るだけでこの若者を見つけ、穴の中から引っぱりださせて、首をはねさせました。二番目の若者は、お城の地下にある穴蔵の中へもぐりこみましたが、お姫さまは、この若者も一番目の窓で見つけましたので、命をおとしてしまいました。そして、この首は、九十九番目の杭に刺されました。すると、一番年下の若者が、お姫さまの前に歩み出て、一日考える猶予をください、そのうえ、お願いですから、発見されましても、二度まではお許しくださり、もしも三度目に失敗しましたら、もう命はいりません、とたのみました。この若者は、たいへんな美男子で、それにまた、そのたのみ方には真心がこもっていましたので、お姫さまは、「よろしい、その願いはかなえましょう。けれど、うまくはゆかないでしょうね」と言いました。

次の日、若者は、どう隠れたらよいものやら、長いことじっくり考えましたが、それもむだでした。そこで、若者は、猟銃を手に取って、狩へ出かけました。若者は、カラスを見つけると、これに狙いをつけました。ちょうど若者が引き金を引こうとすると、カラスは叫びました。「撃たないで！　この恩返しはきっとしますから。」若者は、撃つのをやめて、先へ進み、とある湖のほとりに出ました。すると、水の底からあがって、水面に出てきていた大きな魚は、この若者を見て、びっくりしてしまいました。若者が魚に狙いをつけると、魚は叫びました。「撃たないで！　この恩返しはきっとしますから。」若者は、魚を見逃してやり、先へ進むと、びっこを引いているキツネに出会いました。若者は、猟銃を撃ちましたが、当たりませんでした。すると、キツネは叫びました。「そんなことより、こっちへきて、おいらの足に刺さった棘を抜いておくれよ。」若者は、なるほどキツネの言う通りにしてはやりましたが、そのあとでキツネを殺して、その皮をはいでやろうと思っていました。キツネは、言いました。「撃つのはやめてよ！　この恩返しはきっとしますから。」

若者は、キツネを逃がしてやり、そして、日が暮れましたので、家へ帰りました。

次の日になると、若者は、隠れなければなりませんでしたが、けれども、頭が痛くなるほど考えても、どこに隠れたらよいものやら、見当もつきませんでした。若者は、森の中のカラスのところへ行って、言いました。「ぼくは、きみを生かしておいてあげたんだから、こんどはきみが、どこへ隠れたらお姫さまに見つけられずにすむか、ぼくに教えてくれよ。」カラスは、頭をひねり、長いこと考えこんでいました。やっとのことで、カラスは、しゃがれ声で叫びました。「思いついたぞ！」カラスは、自分の巣から卵を一つ取ってくると、それを二つに割って、その中へ若者をしまいこむと、卵の傷をもと通りになおして、卵を抱きかかえました。お姫さまは、一番目の窓に行きましたが、若者を発見できませんでした。次から次へと窓を進んで眺めてみても、発見できませんでしたので、お姫さまは、不安になり始めましたが、それでも、十一番目の窓のところで若者を見つけだしました。お姫さまは、カラスを撃ち殺させ、卵をもってこさせたうえで、それを割らせました。それで、若者は、出てこざるをえませんでした。お姫さまは、言いました。「これで、一回許してあげたわ。もっとうまくやらないと、おまえの命はなくなるのよ。」

次の日、若者は、湖のほとりへ行くと、魚を呼びよせて、言いました。「ぼくは、きみを生かしておいてあげたんだから、こんどはきみが、どこへ隠れたらお姫さまに見つけられずにすむか、ぼくに教えてくれよ。」魚は、じっと考えこんでいましたが、やっとのことで、叫びました。「思いついたぞ！　あんたを、おいらのお腹の中へしまいこんであげよう。」魚は、若者をのみこんで、湖の底へと沈んで行きました。お姫さまは、次から次へと、窓からのぞいてみましたが、十一番目の窓でも若者を発見できませんでしたので、肝をつぶしました。しかし、とうとう十二番目の窓のところで若者を発見しました。お姫さまは、魚をつかまえさせて殺させましたので、若者も出てこざるをえませんでした。若者が、どんな気持ちがしたかは、だれでも想像がつくでしょう。お姫さまは、言いました。「これで、二回許してあげたわ。でも、

おまえの首は、きっと百本目の杭にのっかるだろうねえ。」

さいごの日になって、若者は、心も重く、野原へ行くと、キツネに出会いました。若者は、言いました。「きみは、どんな隠れ家だって見つけることができるよね。ぼくは、きみを生かしておいてあげたんだから、こんどはきみが、ぼくがどこへ隠れたらお姫さまに見つけられずにすむか、ぼくに教えておくれよ。」「こまったねえ。」こうキツネはこたえて、むずかしい顔をしました。やっとのことで、キツネは叫びました。「思いついたぞ！」キツネは、若者をつれて、とある泉のところへ行くと、その中へもぐりこみ、市場の動物商人となって、出てきました。若者も、水の中へもぐりこまされて、小さなアメフラシに変えられました。商人は、町に行って、そのかわいいアメフラシを見せ物に出しました。おおぜいの人人が、それを見物するために集まってきました。しまいには、お姫さまもやってきて、それがたいそうお気に召したものですから、お姫さまは、商人に大金を支払って、アメフラシを買い求めました。商人は、それをお姫さまに手渡す前に、アメフラシに向かって言いました。「お姫さまが、窓のところへ行くたびに、すばやくお姫さまのおさげ髪のかげに這いこむんだよ。」いよいよ、お姫さまが若者を探し出すときがやってきました。お姫さまは、順番に一番目の窓から十一番目の窓まで行って、そこからのぞいてみましたが、若者を見つけることができませんでした。十二番目の窓からのぞいてみても、若者を発見できませんでしたので、お姫さまは、不安といかりでいっぱいになり、そのあまり、思いっきり強く窓を閉めましたので、窓という窓のガラスは、こなごなにくだけ散り、城中がビリビリっとふるえるほどでした。

お姫さまもおどろいて、あとずさりすると、おさげ髪のかげにアメフラシがいることが分かりましたので、それをつかんで、床へほうり投げて、叫びました。「あたしの見えないところへ行っておしまい！」アメフラシが、商人のところへ行くと、二人は、いそいで泉のところへ行って、水の中にもぐりこんで、もとの姿にもどりました。若者は、キツネにお礼をして、言いました。「カラスも、魚も、きみにくらべたら、大マヌケだね。きみは、ちゃんとコツというものをわ

きまえているんだから。それこそ、本物だよ！」

若者は、遠慮なく、お城の中へと入りました。お姫さまは、すでに若者を待ち受けていて、自分の花婿に迎えました。婚礼の式が祝われ、若者は、今や王さまとなり、国中を治めました。若者は、三度目にどこに隠れたか、また、だれが自分を助けてくれたのかを、決してお姫さまには話しませんでした。ですから、お姫さまは、若者がなんでも自分の力でやってのけたのだと考えて、若者を敬いました。なぜって、お姫さまは、心の中で、ひそかにこう考えていたからです。「あの方は、なんたってあたしより上なんだから！」

注

この翻訳の底本は、≪Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980.≫である。

訳者は、『グリム童話翻訳の歴史的外観―著者による童話八編の新訳と共に―』と題して、平成一二（二〇〇〇）年二月に、すでにグリム童話八編の新訳を呈示した。その後、『新訳グリム童話四編―KHM九、一一、一二、一五―』と題して、平成一六（二〇〇四）年一月にグリム童話四編の新訳を、『新訳グリム童話五編―KHM一九、二五、二八、三四、五二―』と題して、平成一七（二〇〇七）年二月にグリム童話五編の新訳を呈示した。その翻訳方針は、前回と同様で、「適宜ルビをふった」。

今回で新訳の試みは四回目となる。この機会に、「フロイトの精神分析」に関するメモをここに記載しておく。

フロイトの精神分析

精神分析学の創始者であるフロイトを今世紀最大の思想家の一人と見なすことには、恐らく誰も異論はないであろう。それどころか、ドイツの言語学者であるハンス・エガースの統計によると、『ローヴォルト・ドイツ百科事典』において最も頻繁に言及される人名は、第一にソクラテスであり、続いてフロイトであると言われる。このことからも分かるように、フロイトの思想は、単に精神分析の分野ばかりではなく、哲学や文学、社会学、民俗学、文化人類学等、極めて幅広い分野に大きな影響を与えている。従って、彼の思想全体を限られた紙数の中で解説することは至難の業である。

ユダヤ人の家系に生まれたフロイトは、ウィーン大学医学部神経病理学の私講師の資格を取得した後、開業医としての道を選んだ。当時、ヒステリーは女性に特有な病気であると考えられていたが、フロイトは、パリ大学医学部のシャルコー教授の下での体験に基づいて、ヒステリーは男性にも見られる事実を発表した。しかし彼は、このことによってウィーンの医学界から大きな反発を買うこととなった。この不運にもめげずフロイトは、リビドーの考えに基づく独自の研究を続け、エス――自我――超自我という心の構造を体系化した。彼の自由連想法に基づく治療法や夢判断、トラウマ、エディプス・コンプレックス、抑圧、検閲、防衛機制、願望充足といった用語は、今や私たちの日常生活においても馴染み深いものとなっている。

(1) **ヒステリー**：語源上は、「子宮」を意味する。心的に抑圧された過去の特殊な経験が身体的症状に転換されたもの。

(2) **リビドー**：自我衝動に対立する性的衝動。心的現象を量的に記述することを可能にする概念。

(3) **エス**：心の無意識。心的エネルギーの源。生物的・遺伝的に親から受け継ぐ。

(4) **自我**：エスと超自我の中間に位置し、現実原則に従って環境への順応を求めるもの。

(5) **超自我**：エスの衝動と自我の働きを道徳や良心の呵責によって抑圧するもの。

(6) **自由連想法**：催眠術を用いず、患者に自由に語らせることによって抑圧されている心的な情動を意識化させる方法。

（7）トラウマ：心理的に受けた心の傷。意識化されない時、様々な症状をもたらす。

（8）エディプス・コンプレックス：三～五歳頃に、幼児が異性の親に愛着をもち、同性の親に敵意を抱き、その親の死を欲するという抑圧された願望。

（9）抑圧：意識することに耐えられない衝動を代理しているもの（言葉やイメージ）を意識にのぼらないように排除する働き。

（10）検閲：衝動が意識の表層に現れようとするとき、その衝動を評価・批判する機能。夢は無意識の衝動が変装したものと考えられる。

（11）防衛機制：衝動や情動からくる葛藤や不安を統制・自制しようとする働き。

（12）願望充足：願望が満たされた状況を空想することによって心的緊張を解消すること。

（13）その他：隠蔽記憶、快感原則、自己実現、転移、反復強迫、失錯行為、出産外傷、退行、強迫神経症、去勢コンプレックス、攻撃本能など。